

第105回日本精神神経学会総会

シンポジウム

スティグマを超えて——“逸脱点のある常人”との就労物語——

梁田 英麿 (東北福祉大学せんだんホスピタル)

林宗義氏は自らの著書で「適切な治療を受けた精神分裂病（現：統合失調症）患者が、病院から社会に戻って楽しんでいる姿を地域の人たちに理解してもらうことこそ、偏見をなくしていく上で重要である」と述べている。それから25年以上経った今、理念上では「入院医療中心から地域生活支援中心へ」と精神医療・福祉の進むべき方向性は示されたものの、日本は未だに“精神病院大国”として世界に君臨しているのが実情だ。私は、この現実を変えていく動力の一つとして、「障害者が街で働いている姿を地域の人たちに理解してもらうことこそ、偏見をなくしていく上で重要である」と考えている。私が従事しているACT (Assertive Community Treatment：包括型地域生活支援プログラム) とは、たとえ重い精神障害を抱えていても住みなれた場所で安心して暮らしていけるように、さまざまな職種の専門家から構成されるチームが支援を提供するプログラムのことを指す。2003年から国立精神・神経センター

(現：国際医療センター) 国府台地区で実施された試行的事業“ACT-J”では、重い精神障害を抱えた人が退院し、一般就労を実現することによって、その人を取り巻く環境（企業や家族、治療者など）が大きく変化していく場面に遭遇することができた。これを引き継ぐ意思で、私は昨春から仙台におけるACTチームの立ち上げに邁進している。他方、「治療」を優先して就労活動を制限するのではなく、就労を目標とする本人の希望を実現させていくプロセスが自尊心やQOLの向上につながり、結果として治療的にも作用するという援助理念を関係者同士で共有するための街のネットワークを構築中だ。障害者が望む生活を実現するためには、一つのプログラムにその人を当てはめるのではなく、その人のニーズに合わせて個々のサービスの形を新たに作り出していくことで解決の道が見えてくるだろう。

(この論文は抄録集より転載しました)